



## 心を寄せる(8) ～心を寄せるから行動へ～

あれから3年。ウクライナの子どもたちは、苛酷な日々を送ってきました

・3年前、12歳だったヤロスラフは、戦車が迫り来る村を命がけで脱出しました。家族と一緒に森を抜け、教会や学校のかたすみで眠り、たどり着いた隣州の避難所で9カ月間過ごしました。その間に故郷の村は焦土と化しました。翌年、新しく避難した町で、ヤロスラフは地雷の被害に遭いました。義足を手に入れ、再び歩けるようになること、それだけが彼の生きる希望になりました。そしていま、何カ月も待った義足を初めて装着してもらう日を目前に、病院の電源が喪失して通院できなくなり、また希望が砕かれてしまいました。

・7歳のミラナと12歳のポリーナは、大きな音に過剰に反応します。大型トラックが通り過ぎるだけで、しゃがみ込んで固く耳をふさぎます。現在避難している村では砲撃の心配はない、と分かっているにもかかわらず、一方、村の衛生環境は劣悪で、上下水道が機能しておらず、トイレの代わりにバケツを使っています。ウクライナでは最近、衛生状態の悪化や予防接種率の低下から、さまざまな病気に命を脅かされる子どもたちが増えています。

(「unisef」2025年3月の広報誌より)

このウクライナのこどもの状況を読んで、心が痛まない人はいないでしょう。

これまで、青少年育成センターだよりで世界の紛争地の様子をお伝えし、「心を寄せる」というタイトルで悲惨な状況の中で生きるこどもたちを紹介してきました(前号まで7回紹介しています)。今号では、「心を寄せる」思いから「行動」へ繋げるということについて考えてみたいと思います。心を寄せることから、さらに一歩進めてどんな支援ができるのか、どのような行動を起こせばいいのかについて、ここで考えてみましょう。

世界中の紛争地において、医者として、看護師として、国連の職員としてそしてボランティアとして自分の命を顧みずに活躍しておられる方が多くいます。本当に頭が下がる思いです。

日本にも、現地に行って支援をしたいと考えるこどもたちがいると聞いています。きっと人の喜びを自分の喜びと思えるこどもたちなのでしょう。前号でも触れたように、私たちには人に対して心を寄せる気持ち「惻隱の情」が根強く残っています。こどもたちの心にも、「惻隱の情」が根付いているのです。

実際に、現地に行かなくても支援する方法はあります。何か自分にできることがあれば手伝いたいと思われる方は、下記に連絡をされると教えてもらうことができます。家族でこどもたちと一緒に考えてみてはいかがでしょうか。



「公益財団法人 日本ユニセフ協会」

「特定非営利活動法人 国連UNHCR協会」

「特定非営利活動法人国境なき医師団日本」 等

青少年育成センター 指導員 藤村